はじめに

私が最初に関わった災害調査は、1991年に発生した雲仙普賢岳噴火災害の調査である。当時、私は大学院に進学したばかり。学部の卒論では社会学の学説研究を行い、大学院でも理論的な研究を続けるつもりでいた。理論社会学のビッグネームに漠然とした憧れを抱き、彼らの理論に近づくことで社会的現実がより深く理解できるようになると考えていた私は、しかし他方で当時はやりの「ポスト・モダン社会学」になかなか意味を見いだせず、悶々とした日々を送っていた。そんな折、そのような状況を知ってか知らずか、当時ご指導いただいていた九州大学の鈴木広先生から普賢岳災害の調査のお誘いを受けた。現場に出れば何か新たな展望が開けるかもしれないという安易な期待から、私はその話をお受けした。しかしその期待は無残にも打ち砕かれた。

普賢岳の調査で痛感させられたのは、それまで私が学んできた社会学の理論的知識がまったく役に立たないということだった。被災家屋からいかに土砂を取り除くか、救援物資の仕分けや配達を誰がどのように行うか、家を失った被災者に日々の寝場所や食事をどのように確保するか…。被災現場で切実に求められるこれら個別具体的な対応に対して頭でっかちの私はなす術もなかった。大学関係者は物事をよく知っているという期待からだろうか、何人かの被災者から「私らはこれからどうすればよいでしょうか」といった相談を受けたが、答えられるはずもなかった。私たちは目まぐるしく変わる情勢の変化をただただ記述するしかなかった。新たな理論的展望どころか途方もない無力感に襲われた。理論と実践の統合は社会学永遠の課題といわれるが、その難しさを身をもって経験させられたのがこの災害調査であった。

若さゆえの純情から、当時の私が学問（社会学）というものに対して今となれば赤面ものの過大な期待を抱いていたことは確かである。社会学理論そのものに対する認識も浅薄だったといわざるを得ない。しかし学問的知識を漠然と高邁なものとして信奉していた私に、そのような考えを根本から揺るがす体験

を与えてくれたという点で、普賢岳調査は貴重なものとなった。研究の方向性をめぐって何年かの葛藤期間はあったものの、以後、私は研究の軸足を理論研究から実証研究に移すようになった。理論への関心がなくなったわけではないが、その意義は現実の諸問題との突合せの中で問うようになった。

とはいうものの、災害研究とオーソドックスな社会学的研究の間にある微妙な乖離感はその後もわだかまりとして残った。何よりも緊急の現実的対応が問われる災害の研究で、「学問との連続性」に固執しても明らかな限界があるし、場合によっては弊害にもなろう。災害の研究はまずは防災のための政策科学的研究が基本になるべきだと思う。しかし他方で、具体的な日常生活の営みとのつながりを欠いた対策論が実効性をもち得ないこともいうまでもない。対策を講ずる前提として社会の現状分析を深めることが重要である。そしてこの点で、都市や地域を対象とした社会学の基礎的研究が災害の研究にももっと有機的に取り込まれる必要があるのではないか。

前置きが長くなったが、本書は2003年7月に福岡県で発生した集中豪雨災害に対する被災地の対応を社会学的なモノグラフ（詳細な記述）として綴ったものである。この災害に関わるようになったきっかけは、九州大学の橋本晴行先生を代表とする共同調査（「2003年7月九州豪雨災害に関する調査研究」）に研究協力者として参加したことにある。当初は被害状況の緊急報告を目的としていたのだが、現地で聞き取りを重ねるにつれ、いつしか被災地の社会構造や歴史的沿革に関心が移っていくことになった。その後、さいわい科研費（「2003年九州水害に関する都市―環境社会学的研究」）が採択され、被災地の災害からの復興過程に関する調査を続けるとともに、災害が発生した歴史的、社会的背景に関する分析を深めることができた。そのようなわけで、本書の最大の特徴はこの災害に対して住民や行政が「どのように対応したのか」だけでなく、そもそも「どうしてこのような災害が発生したのか」を被災地が辿った都市化のプロセスとの関わりで捉えようとしたことにある。高度成長期以降の宅地開発や産業構造の転換に伴って地域の土地利用や住民の地域生活はどのように変化したのか、またそれは都市水害の発生や災害後の防災まちづくりにどのような影響を投げかけたのか。これが本書を貫く問いである。都市化という

一般的な社会経済的動向への着目を通して、災害と社会のより有機的、統一的な把握を試みたのが本書の特徴である。またそれは、上述した災害研究と社会学の統合を目指す試みでもある。

なお、本書では災害や地域社会の研究者と同等に、行政職員や一般の地域住民の方々を読者層として想定している。社会学の知識は研究者の独占物ではなく、実際の政策や生活の中に取り込まれることでその真価がためされると考えるためである。そのため、特に専門的な予備知識がなくても理解できるよう、分析の背後にある「学論」への言及はできるだけ差し控え、文体も平易にするよう心がけた。学術的な著作という性格上、第１章で災害社会学の先行研究の整理を行ったが、この手の議論に関心のない方は読み飛ばしてもらってさしつかえない。

本書で取り上げる災害はそれほど規模の大きな災害ではない。災害の翌日には全国ニュースで報道されるが、数日も経つと世間から忘れ去られてしまうような類の災害である。しかし対策を講ずるに値する災害は阪神大震災や南海地震といった巨大災害ばかりではないし、むしろより頻繁に直面することになるのはこのような「ふつうぐらい」の災害である。にもかかわらず、「ふつうぐらい」であるがゆえに、この種の災害が掘り下げて研究されることはこれまで少なかったように思う。また、災害を都市化や開発との関連で捉えるという視点にしても、学術的な価値云々の問題以前に、少なからぬ地域で結構重大な関心事とされているようである。これまで幾度か当該の災害について一般市民を前に講演する機会をもったが、フロアの反応からそのような思いを強くした。まだまだ不備な点が多いことは重々承知しつつも、本書の刊行に踏み切ったのはそのような思いからである。この小著が地域社会の現状理解や生活に根ざした地域防災力の向上に多少なりとも役立つなら、筆者にとっては望外の喜びである。

2011 年 10 月

著　者

都市化と災害

—とある集中豪雨災害の社会学的モノグラフ—

目　次

はじめに…… i

第１章　災害社会学と都市の社会変動 …… 1

1. 災害社会学における「社会」　1
2. 創成期の研究動向―災害と社会変動―　3
3. 確立期の研究動向―都市の脆弱性をめぐって―　8
4. 1990 年代以降の展開―都市社会学への包摂―　11
5. 本書の分析枠組　17

第２章　太宰府市における開発 …… 24

1. 開発と開発規制の時代　25
2. ハードからソフトへ　30
3. 開発路線への回帰？　33
4. 都市政策における災害とコミュニティ　37

第３章　社会的世界の変容 …… 40

1. 共同体的土地利用の持続と変動　41
2. 社会構造の分化と溶解　48
3. 古い問題の新しさ　57

第４章　混住地域の災害 …… 61

1. 被害の発生構造　61
2. 災害過程　65
3. 新興住宅地の脆弱性　80

第５章　中心市街地の災害 …… 84

1. 飯塚地区の構造と変動　84
2. 災害と被害の特徴　94
3. 災害への対応と防災意識　100

4. 中心市街地における「居住」の行方　107

第６章　防災まちづくりの現実 …… 112

1. 自主防災と土地利用　113
2. 復興と防災のジレンマ　118
3. 防災まちづくりの日常的基盤　124
4. 防災と都市成長主義　129

第７章　災害研究と社会学 …… 135

1. 都市化と災害　135
2. 防災研究の社会学的課題　138

資料編 …… 143

資料１　調査記録　144
資料２　防災とコミュニティに関する意識調査　単純集計結果　147

あとがき …… 163

索　引 …… 165